

## 第21回ヤンマー学生懸賞作文 銅賞

### 酪農家として目指すまで

46期生 嵐雄一朗

私の家は兵庫県三田市で酪農を営みながら季節の野菜や米を作る何処にでもあるような農家で、私はその家に三人目にして待望の男子として生を受けた。今まで女子しか授からなかった両親や祖父は「やっと総領息子ができた」と喜んだそうだ、幼い頃はそんな期待が満更でもなく父や祖父の後ろについて畑仕事や牛の世話などを手伝っていた。

しかし、大学に進学を考える頃まで成長すると農大を選ばずに、理工系の大学を専攻した。それまで家事の手伝いを続け農業のすべてを知っている気になっていた私は、親に「農業以外の世界を見てみたいんだ」と言って説得した。今思えば世間知らずで世の中を斜に構えたことをしたものだと思う、まるで田舎から逃げ出す小説やドラマの農家の息子と同じである。それでも「お前がそこまで言うなら頑張ってみろ」と許してくれた両親にはどんなに感謝しても足りないくらいである。

そして単身実家を離れ大学に通った4年間もあっという間に過ぎ去り、昨今の就職難の憂き目にあった私は久しぶりに実家に帰ってみると少し困惑した。4年の間に送り出してくれた両親は考えていた以上に老け込んでおり白髪が目立つようになっていた、元気だった祖父も一回り小さく見えた。そこでようやく『嗚呼、自分がいない間にずいぶんと苦勞をかけていたんだな』と気づくことができた。しばらくは親の勧めもあって就職活動をしながら家の手伝いをすることとなった。異論はなかった、働かず者食うべからずである。就職活動を続けるのも大学を出たというプライドのようなものがあったし、農業をしなくてもいいならそれに越したことはないとも考えていた。やはり、心のどこかで『農業は辛いもの、こんな気持ちの者が後を継いでも長続きはしない』という考えがあったのだろう。

そして就職活動と家の作業をする生活が始まった。就職活動は面接を繰り返すばかりで一向に良い結果が得られず、月日だけが流れていった。そんな中、家で手伝いしていると私は違和感を覚えた。牛舎で牛を搾乳している牛はどれもすこし痩せて見え、乳頭も皺が多く乳房もあまり張っていなかった。私なりに何故かと考えてみると、牛に飼料を給与するのは朝と夕方だけで、両親も祖父もその間は農業にかかりきりになっていて昼間に餌をやる者が居なかったのである。案の定、昼間に牛舎に行ってみるとそれまで寝ていた牛がすごい勢い

で鳴き出し、人を見かけると餌を貰おうと彼女たちはサインを出していた。今まで家に居てもそんな風を感じたことはなく、ただただそれが『当たり前』の風景だと思っていたが、外に出て帰ってみるとそれは確かに『何かがおかしい』と感じさせるものになっていた。そこで親に許可を取り、昼間にも餌の乾草を与えることにした。牛は勢い良く草を食べ、その様子を見ながらどのような変化があるのか期待して給与するのが新たな仕事となった。

それから二週間もしないうちに目に見えて変化があった、乳頭に張りが出てきたのである。一緒に作業していた父は何も言わなかったが私はそんなわずかな変化も嬉しく思い、仕事にも力が入った。乳量も僅かながらも増えているのが数値として見て取れたことも、喜びとして感じる事ができた。そして、そこにはもっと他にも改善できる場所はないか？乳量をもっと増やすにはどうすればいいか？と考える自分がいた、農業には就きたくないと思っていた自分はいなかったのである。何も知らない人が聞いたら「就職活動に疲れて実家に仕事に逃げただけ」と言うかも知れない、そう言われれば私も否定できないが、このときから牛を育て牛乳を搾って生計を立てていく酪農業に、魅力を感じ前向きに取り組み始めたのも事実である。

そんなとき私に転機がやってきた。季節は春から夏になり、このまま家業を継いでいこうかとも考え始めた頃に事件が起こった。初産の牛が立て続けに二頭、体調を崩してしまったのである。初産の牛というとこれから稼ぎ頭になっていく牛である、それが立て続けに体調を崩すとなると牧場に与える損失は計り知れない。しかし私は原因も解らず、ただ何をする事も出来ずに弱っていく姿を見守ることしかできなかつた。私はそんな状況を打開する知識も力もまったくないことを思い知らされ、酪農業は身体だけでできる仕事ではないことを痛感させられたのである。経験だけですべてを知っていると感じていた自分が悔しくてたまらなく、またそのような体たらくで後を継ごうと考えた自分に呆れた。

このままではとてもではないが家を守っていくことができないと思った私は家族に酪農について勉強したいことを相談すると、父と祖父が短期の酪農大学があることを教えてくれた。家計としては苦しいはずなのに、その大学に行くことは賛成のようだった。両親は「二年くらいなら頑張れるわ、しっかりものにしてきいよ」と励まされた。祖父には「回り道ばかりしよってからの、こんアホが」と笑顔で叱責された、まったくその通りなので苦笑いで返すしかない。どうやら私は父より農業に対して筋がいいから子供の時よりも期待されていたようだ。本当に心配ばかりかけてしまっているが、これからは自分がその分まで恩を返していけないといけないと決意し感謝した。

今は財団法人中国四国酪農大学校にて勉強をしている。大学での同級生や先

輩は皆が年下だが、私より知識も経験もある『先輩』たちであり学ぶことが多い。だが私も年上として彼らに知っていることを教えたいと思っている。私が持っている経験も何かしらの役に立つかもしれないし、別に多くのことを知ることは悪いことではないとも思っているからである。

そして私はこの大学で勉強をする中で家を守っていくこと意外にひとつ夢ができた。それは酪農業をする後継者を育てることである。私がここに来るまでに考え実践することが酪農の『手に取れる成果』という楽しみを知る上でどんなに大切かを感じてきた。昔の自分がそうだったように、後継者とはただ押し付けられるのではなく自分から動かなくてはいけないと思う。現在酪農業をしていない人は現場を知ることができず、知識だけで酪農業を考えている人たちである。それは仕方がない情報社会である今、情報は簡単に調べられることはできても、体験できる場は本当に少ない、できたとしても搾乳体験であったり日曜農場のような「さわり」程度である。それだけでは酪農業をしていきたいという経験をする事ができないだろう。しかし、現代人が時間に追われるほど忙しい生き物であるのも私が同じであるように理解できる。なので、時間がある学生を対称に知る場を作りたいと考えている。長期休暇などの期間に門戸を開き酪農業ライフを体感してもらおうのである。今はまだ拙い構想だが請うような事でも酪農者を目指す者が現れたらいいと思うし、後継者問題の解消に一役買えるようまずは自分が立派な後継者となれるよう努力していきたい。